

---

# 続きを書きましょう

有志多数

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続きを書きましょう

### 【Nコード】

N6962Q

### 【作者名】

有志多数

### 【あらすじ】

小説企画を打ち上げてみます。どなたも是非にご参加ください。リレーのように別々の作者が、続きを書いていくという企画です。

決まりごとは以下の通り。

- 1・前までの作品をちゃんと読むこと
- 2・年齢制限なし
- 3・200文字以上（じゃないと投稿できないので。万超えちゃっても良いですよ）

4・連続して同じ作者が続きを書かない（誰かの続きに、また参加するのはOK）

5・続きがどうなろうと文句なし

場面・視点・世界転換オールOK（異世界行っちゃってもいいですよ）

フラグを新たに立てようが、回収しようが、壊そうが。

キャラを新たに作るも、壊すも、殺すのさえも自由。（嗚呼、物騒な単語が……）

出来れば、前までの作品を反映させてくださいな。（反映しなくともOK）

文学、童話、ライトノベルに、ミステリー調。どんな作風の方も（フリースタイルな方も）大歓迎です。

参加希望の方は、ごんたろうまでメールで続き作品を送ってください。

（あちこちのページに飛んで続きを見るの面倒だと思うので、言いだしっぺとして、一括管理させて頂きます）

全体的な作者名は「有志多数」としておきますが、中に目次を作りそれぞれの話ごとの作者名を載せますので、ユーザー名とは違う作者名にしたい方は目次用の作者名もメールの方に書いておいてください。

字数が多くて幾つかのメールに分かれる場合は、その順番と、分断された部分の行間が何行かも書いてくださいね。

後書き用に一言（どころじゃなく長くなっても大歓迎）をくださると嬉しいです。

本編に載せるのは早い者勝ちです。（争うほどの人気あるかどうか、分かりませんが）

何話の続きを書きたいから確保したいという場合も、ごんたろうまでメールをください。（ごんたろう、恐ろしいことに2匹います、どちらが私です。『』とある商店街にて『』という小説を投稿してる奴の方が、返信早いですよ）

もし、一つの続きに参加希望者が多数出た場合は、別枠を作って、パラレル第何話として掲載したいと思います。

そして、参加される場合は、「小説家になろう」サイトの新規小説作成や、ワードなんかで、予め完成させてから、コピー&貼り付けでメールにするのがお勧めです。（その方が、書きかけ保存が出来るので）

ごちゃごちゃと長くなってしまいましたが、お気軽にどうぞ。

ゝ 各話の作者 ゝ

ゝ 各話の作者 ゝ

第一話 こんたろうより

第二話 シトラチネより

第三話 ヤシタ婪より

第四話 太陽真より

第五話 百合宮桜より

第六話 夙多史より

第七話 セウルより

第八話 ツクモより

第九話 時流幌より

第十話 学無より

第十一話、募集中です（\*^|^\*）

どなたか書きたい方いらっしゃいませんか？

ここで、ちょっとこのリレー小説について、補足説明を行いたいと思います。

この私が運営しているリレー小説『続きを書きましょう』は、サークルのように決まったメンバーで続きを書いていつているものではありません。

この小説を読んで、興味を持った方、続きを書きたいと思っただ方がヒヨイツと訪れ、参加してくれるのを待っているお祭イベントのような形態を取っているのですよ。

物書き初心者さんも、物書き玄人さんも、経験全く無しな方も大歓迎！！

ごんたろうなんて、全く知らないという方も、既に何処かで知っているという方もどんな方も大歓迎！！

なんてったって「お祭り」ですから、楽しむことが第一です。

そして、作風などを前までの小説に無理に合わせる必要も有りません。

（敢えて、合わせて書いていつもと違うタッチで書くのを楽しむのも有りですが）

ある食材から始まったこの小説。

『貴方風味の一話』を足して、お好きに料理しちゃいましょう。

結果、何が出来あがっても文句無しでお願いします。

嗚呼、一度、闇鍋やってみたいですね!!

私の友達、付き合ってくれないのです。

家族にも、アンタとはやりたくないと言われてしまっ……。

さびしい世の中ですよ。

カレーとかで遊んじゃうからいいけども。

いつかは実現したい私の野望の一つです。

興味持たれた方へ。

第十話の予約は、第九話を読んでからお願いします。

第九話以前を書きたいという方は、パラレルとして別枠で掲載いたしますよ。

番外パラレル編みたいな感じで、別にページを作り、シリーズものとして「続きを書きましょう」と纏める予定。

（パラレルの方は、到着順にただ置いとくだけで、続き募集はしませんよ。

ネズミ算になってしまうので）

小説書いたことがなくっても、どうぞ続きを書いて、メールでこんなところまで送ってください。

『続き』 待ってる間の暇つぶし 不定期更新『一文連載』第一弾――

もうそろそろ昼休みが終わる。

---

200文字行かないと、投稿できないのです。

作者数人しかいないから、この「各話の作者ページ」投稿するた  
め、無駄話を綴っておりましたのを、そのままにしておきます。

あと42字!!

空白・改行含めて数えられない事を初めて知りました。

あと10字!!

それでは、みなさまご参加お待ちしております。

## 第一話

燦々と降る太陽の光。

艶めく深紅のボディからは、ダイヤモンドのように光輝く雫が落ちた。

嗚呼、何故太陽はこんなにも眩しく、こんなにも熱く光り輝いているのか。

まるで、私を焼き殺さんばかりに燃えている。

灼けつく空気に晒された肌が、ピリピリと痛んだ。

その時、私の目から零れ落ちた水は、幾分の塩気を帯びていた。

口許を鷺掴みにされ、私はもがいた。

私の華麗なる筋肉をもつてしても、その拘束から逃れることはできない。

嗚呼、私の命運はあの瞬間に尽きたのだ！

「父ちゃん、タコとったあ」

## 第一話（後書き）

第一話、こんな感じですね。

フリーダムなんで！文句は言いつこなしですよ

ふっふっふ、「太陽」と「タコ」、「しゃべる生命体」が居る事  
ぐらいしか書いてません。

世界観、後続の方にする投げでございます。

どんな物語になるんだろう？

執筆参加者にも分からないハラハラ感をお楽しみください。

作者さん側に反響があれば、第二弾も目論んでいる私でございま  
す。

## 第二話

ウツボとの死闘。

人知れず沈む海賊船で、金貨の山を全触手でヒーハーしたり。

イカからの求愛。

クラゲがたゆたう満月の夜、深い海で塩を挽き続ける臼の音を聞いた。

海での記憶が漁火のように脳裏をめぐり遠のいていく……

燦々と降る陽光が私をあぶる業火となり、私の命の火が消えかけたその時。

「父ちゃん、焼けてきたあゝ。いい匂い」

私は二本に減った手でタコを裏返していた。ついさっきまで私が入っていたタコを。

そう、私の意識は少年の体に収まったのだ。

「おお、良く焼けたようだな！　だがつまみ食いはするなよ！」

ずる賢そうなオヤジが『父ちゃん』らしい。

いい色に焼けた私の抜け殻、すなわちタコを皿に移して渡しに行

く。歩くのは久しぶりで足がもつれた。

「ダイヤモンドのように水を弾く深紅のボディ、間違いねえ。まさにこいつが例のタコだな！」

父ちゃんの鼻息が荒い。タコを見つめる目には欲望が燃えている。

少年に移ってつくづく命拾いした。オヤジの熱い鼻息と視線を浴びる趣味はない。

父ちゃんの震える手が皿を掲げ持った。

「早速、お届けだ！」

## 第二話（後書き）

楽しい企画に飛びつかせていただきました。

打ち上げてくださったごんたろうさんに感謝します。

第一話のごんたろうさんのタコ描写に「雨上がりの南国を走るフェラーリか？」と騙されました。

爽快にくやしいのでステキタコに。

### 第三話

わたしの名は

タコ

そう、青くゆらめく海の中を自由自在な動きでたゆたう、あのタコ。

そのわたしが今居るのは皿の上。

「さあ、お届けだ！」

その男は父親で、わたしを釣り上げ網焼きにした張本人。

わたしはなめらかな海の中から、風の吹きすさぶ乾いた地上へと釣り上げられ、哀れ焼きダコとなり、皿に盛られる運命となったのだ  
った…

「フンフンフーン」

父親は鼻歌混じりに皿に乗ったわたしを運んだ。

そのうしろを、物欲しげに採れたて焼きたてのタコを見つめ、ついていくのは父親の息子。

わたしが変幻自在に泳げるのは海だけではなく、この現世、魂の世界もそうだったようで、焼かれて死んだタコの形から抜け出したわたしの魂は、吸盤で吸い尽くようにその息子の体からみついていたのだ。

そうしてわたしは見守る。

わたしのあの神から与えられた美しくしなやかな肢体、焼きダコの姿となりはてたものがどこへ行き着くのか…

「お持ちしましたー！」

父親は皿を掲げ持ち、膝について平伏した。

白くさらさらの砂浜に立てられたパラソル。

その下のデッキチェアに横たわる相手が、この父親の征服者であり、わたしが捧げられた人物であるようだ。

わたしは少年の体に、平凡な者には見えない8本の足を絡ませ、そのパラソルの下にいる人物を見た。

白いデッキチェアにのばされ組まれた足は…ヒゲの生えた極太大根！（形いびつ）

スカートはひらひらで、やたら黄色い！

樹齢100年はゆうに超えた丸太のような腰、そしてそこへ被せるように3段乗った腹！

もう巨乳というか乳というか脂肪の塊というか、形容しがたい白い固まりが2つ外向きにさらに重なり！

最後に絞り出したようにアゴ下がだるだるした顔のてっぺんには、もじやもじやした毛がまとわりついていた。

「あら、おいしそう」

低くハスキーな声を、ぬらぬらした赤い少しつきだしたような唇が発した。

青く血色の悪いまぶたが重いまつげをバサバサゆらし、小さく上向きの鼻がピコピコ息を吹く。

「わたしが食べちゃっていいの？」

デッキチェアに寝そべった、黄色いワンピースの巨大なデブ女がそう笑った。

なんというムチムチバディ…

わたしの体はこれから彼女の腹に収まるというのか？！

「お醤油がいかしら、お塩がいかしら？」

彼女が重い体を持ち上げた。

### 第三話（後書き）

つづけて

## 第四話

嗚呼、とうとう私の器は巨大人間のもとへと…

白い服装の男が女の後ろから進み出た。  
手には男自慢の特製たれを捧げ持っている。

「かつかガハあ！」

しかし男は大根のような太つとい脚から音速で繰り出された踵落としをまともに喰らい、砂浜にめり込んだ。

「お仕着せを脱いでいる時はご主人様とお呼び！」

砂から顔を出す事もできず、ピクピクと不気味に痙攣を繰り返す男に、果たしてその台詞は届いたのだろうか？

その場に居た者全員の疑問だろう。

「さあ、待たせたわね。」

鬼のような形相で砂にめり込んだ男を睨みつけていたが、気を取り直したのか、女はにつこり笑いながら親父へと振り返った。

親父は顔面蒼白になりながらも、何とか震える手を宥めて皿を差し出す。

「ふふふ…漸くこれがわたしのモノに…」

女はわたしの器へと手を伸ばした。

嗚呼！

わたしはその先を見ることに耐えられず目を閉じた。

とその時

「な・何だいその猫は！」

慌てて目を開ければ、一匹の大きな猫がその場を軽やかに駆け回っていた。

群がる人間達の足元をすり抜けて、とうとう女のもとへと辿り着く。

「何をするんだいっ！」

その大きな猫は啞然としている女の手からわたしの器を奪い取る。

そして混乱する人間達を尻目にその場を後にした。

その時猫はふと振り返ると、きらきら輝く瞳で確かにわたしを見た。

わたしは思わずその後を追って、慣れない2本足で駆け出した。

後ろでは女が大声で何かを叫んでいる。

猫は砂浜を駆けぬけ街に出ると、入り組んだ路地へと進んで行った。

やがて路地の角を曲がった先の、建物に囲まれた小さな空間に辿り着く。

息をきらしてやっと追いついたわたしを、猫は待っていた。

おすわりをして、行儀良く揃えた前脚の下には、わたしの器がうやうやしく横たわっていた。

海の中を自在に泳ぎまわった日々が鮮やかに蘇る。

もう十分なのだろう…

わたしは猫に向かって言った。

「わたしを食べて」

猫は瞬きをすると、わたしの足にかじりついた。

やがて一本の足が半分になった頃、猫はわたしの顔を見上げ、鼻先でわたしをわたしの方へ押しやり、再び瞬きをした。

わたしは慣れない2本の腕で、一本の足をむしり取るとおもむろにかじりつく。

味付けをされていないそれは、何故か海の味がした。

程なく嘴以外は全て見た目一人と一匹の腹におさまった。

猫が立ち去った後、空間に吹き込む風を感じてわたしは、此処が違う世界だと初めて実感した。

わたしは濡れている頬を袖で拭くと立ち上がる。

そうして

海の中でしていた様に、風の中で8本の足を優雅に揺らめかせた。

#### 第四話（後書き）

生物は早目に美味しく頂きましょう。続きをよろしくお願いします。

## 第五話

揺らめかせたつもりのは八本もなかった。たった二本、ついでにだけだった。下上右左、目をぎよるぎよるさせて見つめた。どうやら私は私を食べようとしたあの女と同じ生き物になったらしい。

私は顔をしかめた。はつきり言つて、不本意だ。アレと私は今や同じ生き物なのだ。そのことがたまらなく不愉快で、意味もなく眉間に皺を寄せていた。

ザーザー

波がいつもとは異なるリズムで動いている。嵐の前のような不気味さがある。

海鳥たちは鳴いていない。まるで前からいなかったというように皆どこかに行ってしまった。

私も体がむずむずする。ここから離れるべきなのだ、とタコの魂が警告している。しかし悲しいかな。人間の魂はそれを感じ取れていない。私のベースは人間だ。いくらタコ

として「危険」を理解していても、人間がそれを「理解」しないかぎり私の体は動かないのだ。

ぐわん、ぐわん

全身が湾曲する。周りの人間たちは海を見ながら何やら騒いでいる。ああ、海の神がお怒りになったのだ。薄ぼんやりとそう思った時にはもう、私は父なる水面に飲まれていた。

## 第五話（後書き）

遅れさーせんw w

取りあえず出来ました（^^） /

## 第六話

わたしは帰ってきた。

つい数時間前まで自由に泳ぎ回っていた故郷の海に。

ざっと辺りを見回す。さっきまでわたしのいた足場が海底へ沈んでいた。わたしの体重で脆くなっていた地面が崩れたのだろう。

建物に囲まれた空間からいつの間に海岸へ？ …… そうか、わたしが『人間』となったことを嘆いている間に自然と足が故郷へ向けて動いていたのだ。

もうすぐ嵐が来るのだろう、海は酷く荒れている。

暴力のような海流がわたしの体を押し流そうとしてくる。岩礁に叩きつけられでもしたら命はない。ほぼ即死だ。

——死にたくない。

本来の肉体は猫と少年<sup>わたし</sup>の腹に消え、今のわたしは不愉快極まりない『人間』の体をしている。正直、もうどうなってもいいと思っていた。

でも、いざ命の危険を感じると本能が抗おうとする。タコも人間もそれは同じだ。

死にたくない！ 死にたくない！ 死にたくない！

気づいた時、わたしは荒れる海の中を人間の肉体とは思えない動きで泳いでいた。

優雅に、美しく、まるで空を翔る海鳥のように水中を突き進む。時には海流に乗り、時には岩礁に掴まって方向を変え、縦横無尽に海を駆る。

思い出す。かつてのわたしはどのような荒波にも負けない深紅の大ダコ。すっかり寝込みを襲われなければ人間共になど捕まるはずのない屈強な海の戦士だった。『ダイヤモンドのように水を弾く深

紅のボディの大ダコ——なんて人間たちには呼ばれていたが、確かに、わたしは水をダイヤモンドのように弾き飛ばして人間たちをあしらってきた。

その深紅の大ダコとしての能力が、どういうわけかこの少年の体に宿ったらしい。

フフフ。

思わず表情筋が緩んでしまう。『人間』となって絶望しかけたが、わたしにはまだ誇り高きタコの力が残されていた。なんと喜ばしいことだ。

もはやこの海はいくら荒れようとわたしの土俵だ。泳いでいるうちに四肢にも慣れた。

楽しい。嬉しい。『人間』となった今のわたしでも、タコだった頃のようにどこまででも泳いで行けるのだ！

ぜえー はあー ぜえー はあー。

……死ぬかと思った。

まさか、

まさか人間が水中で呼吸できないとはっ！

わたしはどこかの寂れた砂浜に大の字に寝っ転がっていた。少年の胸が呼吸をする度に上下に動く。まだ息苦しい。

せっかくタコの力を取り戻したのに、人間とは不憫な生き物だ。

潜水をし続けられる時間はたったの三分ほどだった。同じ哺乳類のイルカやクジラだってもっと長く潜れる。

それでも人間としては凄い方なのだろう。このわたしの——タコの力が宿っている少年の肉体だからできた所業だ。……ポジティブに考えればそうなる。

「おいどうする！」「早くしないと」「だが海が……」「こう荒れていては我々にはどうしようもないぞ」「だからってこのまま放っておくわけには」

人間たちの叫ぶような話し声が聞こえる。上体を起こして見やると、彼らは先程海を見ながら騒いでいた奴らだった。どうやらここは元いた場所の近くらい。

関わるつもりはなかったが、わたしは人間たちが見ている方角に視線をやった。

荒れ狂う海上に、小さなシャチがいた。

いや違う。アレは本物ではない。浮き輪とかと呼ばれるものだ。少年の知識がわたしにそう語りかけてくる。

そしてシャチの上には、この少年と同じ年頃の少女が跨っていた。紺色のワンピースを着を纏い、ストロベリーブロンドの長髪を左右で結わえた華奢で可愛い少女だった。

どうもあの少女は海水浴に来ていて波に攫われたようだ。

少女は泣き叫んではないが、その表情が恐怖一色に染められている。

雨が降ってきた。風も強くなっている。このまま放っておけば少女が海の藻屑となることは自明の理だろう。

——助けないと。

待て、わたしはなにを考えている？ わたしを殺し、食そうとしてきた人間の仲間を救う義理がどこにある。

タコの思考で自問している間に、少年の体は勝手に動いていた。

再び荒海に飛び込み、四肢を使って水を掻き、魚よりも器用に泳ぎ進む。

「きやあつ！？」

少女が波に吞まれ、シャチの浮き輪から転落する。ただの人間の、それも少女の華奢な体では荒れる海で自由に動くことは不可能だ。

海流に持っていかれそうになる少女を、わたしは不本意ながらキヤツチする。気を失っているらしい彼女を抱いたまま海面に顔を出す。

大きく空気を吸い込み、元の寂れた砂浜へと一気に泳ぎ抜いた。

ぜえー はあー ぜえー はあー。

なぜ、わたしはこの人間の少女を助けたのだ？

砂浜に寝かせた少女を眺めながら、わたしは自分の行動が理解できないでいた。

「ん……」

と、少女が目を覚ます。すぐに気を失ったことで水はあまり飲んでいなかったようだ。

「あれ？ ここは……？」

周囲を見回す少女が、すぐ傍にいたわたしを見つける。

「あなたが、こほっ、私を、助けてくれたの？」

少女が軽く咳き込みながらわたしを見詰めてくる。エメラルドグリーンのかなかな瞳には少年の姿をしたわたしが映っている。

嘘をつく意味もないので、とりあえず頷いておく。

「そう。助けてくれて、ありがとう。あの、えっと……」

弱々しい笑みを浮かべた少女は、変にもじもじとしながら薄桃色を取り戻しつつある唇を動かす。

「あなたの、お名前は？」

## 第六話（後書き）

いろいろ強引で矛盾とかあると思いますが、そこは私じゃない誰かが頑張るってことで（丸投げ）

## 第七話

「わたし……」

言葉を止める。

わたしは今、少年なのだから僕なのか？

「僕は井沼 いぬま ひさし 尚志だよ」

「えっと、尚志くんって呼んでいい？」

「構わないよ」

軽く微笑む。

なぜ、わたしは彼女を助けたのだろうか。

きつと、父なる海に人間が眠ることが気に食わなかっただけ。そうだろう。

ちがうならこの体 しんたい が、人間だからだろう。

「私は、水島 みずしま 綾香 あやか です……」

どこか恥ずかしそうに頬を赤らめ、その綾香という子が言う。

「まったく、泳げないのなら来るんじゃない」

少し刺のある言い方をする。

「うっ……ごめん……なさい」

「なっ……」

思わず、たじろぐ。

「泣くな。別に怒ってるわけじゃない」

なんだ。

なんなんだ？

人間はこんなにも弱い生き物なのか？！

なんでわたしはこんなことを……

「とりあえず、こっち来て。また波に浚われたくないだろ？」

少女はまだ涙を瞳に浮かべながら、頷く。

高台まで歩いていくと、少女が何かを呟いた。

「ん？　どうかした？」

「お母さん達のところ行かないと」

「どこに？」

「私の家だよ」

はい？

もしかして、この人は一人で来たんですか？

「家がすぐ近くなの。いこっ」

わたしは少女に引かれるままに歩く。

歩くこと十数分。

まったくもって近くじゃないし、

わたしは二本足で歩くことには慣れていないから転ぶし。

結構な豪邸に2人は辿り着いた。

「あっ……」

少女と同じストロベリーブロンドの髪をストレートに靡かせた女性  
が、

少女に走りよって抱き寄せる。

「良かった。心配したのよ？」

「ごめんなさい。ママ」

2人を見てわたしは笑みが零れた。

わたしには親がない。

いや、居たんだろうけど気づけばわたしは一人だった。

兄、弟、妹、姉。

それも知らない。

居たらこんな風だったのか？

この体の父親の元へ戻らないと……

そう思って踵を返したわたしの体は、

タコ足に巻きつかれたような束縛感に見舞われた。

「行くの？」

「え？」

「私の家に行こうよ」

何を言ってるんだ？

わたし？　には親が居るのに……

この子の父親の元に。

だが、海へと向かおうとした意思を、それは止めた。

<津波到達の恐れがあります。直ちに高台へお逃げください>

町のスピーカーから、声が流れたのだ。

少女の母親に少女が、少女にわたしが。

引っ張られて行くままに車に乗り込み、どこか未知の世界へと連れて行かれるのだった。

「君、名前は？」

ぼうつとしていたわたしに少女の母親は尋ねた。

「井沼尚志です」

無関心に答える。

なんでこうなってる。

もう考えるの止めようか。

大体、この子の親はどうなってる？

わたしが戻っていない事を心配してるんじゃないのか？

なのに、少女に連れられ車に乗り込み、  
街の奥へと連れて行かれてる。

「はぁ……」

「どうしたの？」

「へ？」

「ため息ついたでしょ？」

なぜ、ため息だけで話しかけてくるのか。

「別になんでもない。僕がここに居る理由がわからなくてね」  
自分の心情を纏め上げて呟く。

「ご両親は？」

母親が聞く。

「さて。生きているか死んでいるか」

わたしにとって、

この体の両親なんて知らないしな。

父親くらいは知ってる。

けど、わたしを焼いた腹いせに息子を奪ってやった……なんて

「もしかして、記憶喪失？」

「はい？」

なんのこと？

「貴方、自分の名前以外覚えてないの？」

母親が聞いてきた。

記憶喪失というのは、何らかの衝撃を頭に受けた際、  
名前以外のことが解らなくなったり……。

面白いな。

「は……はい。実は、気づけば海に居て……急いで陸に行こうとしたときに、彼女に出会ったんです」

わたしは少女をさして言う。

不自然だっただろうか？

そんな心配を他所に、車は海を見下ろせる高台に着いて止まった。

「記憶喪失……かぁ。台風が去ったら役所に聞いてみましょう。両親

のこと」

「は、はい」

ていうか、名前ですら偽名だったりするし。  
問題ないかな。

「じゃあママ！ 見つからなかったら家に住まわせてあげようよ」

少女は何故か元気になって母親に詰め寄った。

何が嬉しい？

というか、他人を簡単に――

「良いわねえ。それ」

えええええ？！

「役所行つて駄目だったら一緒に住みましょう。ねっ？」

母親が目を輝かせて言う。

なん……だと？

<ハロー警報は解除されました>

そんな馬鹿な。

夕立の如き速さで台風が去るとは……

「じゃっ、いこ？」

「え？ うん」

わたしは、少女達と共に役所へと向かった。

そして、

予測通り、わたしの両親達が居るわけも無く（偽名だから）

「では、我が水島一家にご招待」

彼女達の家に戻ってきたわたし達。

何故かテンションの高い母親に苦笑しながら、

与えられた2階の部屋から海を見つめる。

「ばいばい。海と蛸<sup>わたし</sup>。こんにちは、地上と僕」

そう呟いて微笑むと少女に呼ばれ、わたしは階段を下りていった。

これから世界に心躍らせながら。

## 第七話（後書き）

次の人無茶振りごめん

## 第八話

海の匂いが鼻をかすめていく。

ここは街の奥であるはずなのに、海の特徴の匂いが、懐かしい。与えられた二階の窓から見える海は朝日に染まっていた。少し遠い、けれども記憶に新しいそれは優しく、揺らいでいる。

「おかしいな」

もつと、ずつと遠くに来たと思っていた。

けれども海はすぐそこにあるかのように思える。

息を潜めて窓際から離れずにいると、足音が聞こえてきた。ガチャリ、とドアが開きひよっこりと顔がのぞく。

「えっと……おはよう、尚志くん」

舌つたらずで鼻にかかったような甘い声。

水島 綾香だ。

咄嗟にどうしたらいいか分からずに笑顔をつくって振り返った。

「おはよう綾香ちゃん。早起きしたの？」

「う、ううん。違うの」

照れたように笑う綾香はてくてくと近づいてきた。

隣に並んで、足らない背丈で窓の向こうを覗こうとする。

けれどやっぱり無理だと諦めたらしく、大人しくベットの座り込む。

「おはようって、言おうと思って」

なんだ、そんな事か。

それにしても、わざわざ言うようなことか？

人間ってそういうものなのか？

……分からない。

わたしの中にある少年の記憶は、そういうものだと、言うが。

「そっか。おはよう、綾香ちゃん」

「うん。おはよう」

綾香はにつこり微笑むと、ベットから飛び降りた。

「今日はね、ママが尚志くんを学校に連れてってくれるんだって。私と一緒に学校だよ！」

はいいいっつ？

綾香はそれだけ言うたさつさと出て行ってしまった。

「学校……？ 面倒くさい」

わたしが行く必要ってあるのか？

そう言いながらも、仕方なしに窓から離れた。

身体の気だるさを感じながら、1階に下りると既に綾香の母親が

居た。

どうやら朝食の準備をしているらしい。

「あら、おはよう尚志くん。よく眠れた？」

「おはようございます」

とりあえずニコつと微笑み返してみる。

「朝早いよねー。綾香なんて滅多に起きないのよ」

今だって部屋で寝ちゃってるし。

そう言って笑う母親に思わず「えっ？」と聞き返しそうになってしまった。

さつき、挨拶をしにきたではないか。

「まったく、尚志くんを見習ってほしいわ」

「たまたまです」

まさか。

挨拶するためだけに、わたしの部屋に来たということか？

……意味不明だ。

「今日は尚志くんの新しい学校に行こうと思って。ね？」

「あ、」

聞きました。

そう言おうと思ったが、笑うだけにしておいた。

「……分かりました。おねがいします」

「あはは。いいのよー。綾香と一緒にの学校だから、仲良くしてあげてね」

まったく。

人間というのは、理解不能だ。

首をかしげながら受け取ったお皿をテーブルに運ぶべく、キッチンを離れた。

という事で、学校に来たワケだ。

それが、まさか、こんなことになるとは。

「かえりたい————っ！！」

こんなにも、帰りたいと望んだことがあっただろうか。

これが、ホームシックというやつか。

まあ、この場合、ホームは海なわけだけれど。

そんなことより、わたしはもう帰りたいッ！！



## 第八話（後書き）

次の人ゴメンなさいッ  
無茶苦茶しましたッ

## 第九話

そう、50m走だ。その順番が、あと2人分で来るのだ。

きっかけは、今日の朝の会での事だ。

一応は転校生ということなので、自己紹介をすることになった。

「えーと、名は、井沼です。〇〇県……市から来ました。それで――」

「え？」

「はい、確かに……市は、有名ですよね」

というように自己紹介はつつがなく終了した。

内容はすべて虚偽だったが。

問題はその後の事だった

山村という者が元気よく

「先生！今日の体育ですが50m走にしませんか？」

と提案してしまったのだ。

「え」

「余計なこと言うなよ」（小声）

等々、不満は相当出たが、

一人だけ

「さんせい、今日にしましょう！」

と言ったのは、野田だった。

後で聞いた話だが、この二人は野山コンビと言ってとても仲の良い二人組であるとのこと。

普通なら、言ったその日に実現。というわけにはならないだろう。

しかし、  
あいにく、と言っではなんだが、  
このクラスの担任は、体育の教官で……

こうなつた訳だ。

もう長い間、関節のある動物には移<sup>うつ</sup>つていなかったため、  
走ることには難があつた。  
このままでは、無様な姿を見せてしまうことになるだろう。  
どうするか――

残り2名

関節がきしむように痛い。昨日の無茶のせいだろう。  
それに体が心なしに重いような気もする……

残り1名

むう仕方がない。昨日の要領で走るしかないか。

残り0名

私は前に出た。そして、前の子どもの姿勢を真似した。  
「君！ 白線踏んでるよ！」

体育の先生から注意されてしまった。  
私は慌てて少し後ろに下がる。

「よい……………ドンー！」

走り出すとすぐに、

私の体の全てが悲鳴を上げる。

残り10mぐらい。

痛い痛い痛い痛い——  
それだけしか感じられない。

そして全身が鉛のように重く、一步踏み出すことさえ億劫おくくわうに感じられる。

やっとゴール。

同時に私は地面に倒れ伏してしまった。  
もちろん達成感・快感なども感じなかった。

……むしろ気分が悪い。

「おい、そのー！倒れてるんじゃない！早く戻ってこい！」  
体育の教官が私を呼んでいる。

私は悲鳴を上げる体に鞭打って立った。

これには、驚いた。

私自身というより、この体の前の持ち主。名も知らぬ少年の  
半ば自動的な意識によって体は動かされている。

しかし——

体のダメージは想像以上に深かった。

私は地面に倒れ伏す。

——ちよつと無理し過ぎだったか……——

意識は闇の中へと落ちていく。

目が覚めた時にいた場所は一面白の世界だった。

無論、現実ではない。

さつきまであった体中の痛みも、体の重さも無くなっていた。  
すると、目の前に少年が現れた。

一瞬だった。

「よう、お前が俺の体の新しい持ち主か」  
そう話しかけてきた。

「あなたは誰ですか？」

「俺は、お前と同じ。乗り移れる生き物さ。」

おっと、生き物というより”存在”、か」

「まさか私と同じ存在がこの世にいるとは……」

驚きを隠せなかった。今まで長い間乗り移りを続けてきたが、同じ存在にあったことは一度もなかったからだ。

「俺も不思議だったさ、まあこういうことになる、まだまだこの世界には

俺たちと同じような奴がいるかもしれないってことだ」

「それはそうと、なぜあなたは残っていられたんですか？」

一番の疑問だった。通常、乗り移られた方は乗り移ったほうと交代で入れ替わるからだ。

今回の場合、蛸は無残にも焼かれてしまったが。

「自分から聞いてきてそれか、……まあ良いけどな

ああ、俺も同じようなことを続けてきたからな。

何とか保てた。だけど、新しく入ってきたやつが強いらしい。体の主導権はお前に握られちまったってことだ。

他にも、お前のもといった蛸の体と人間の体は差が大きいんで、結びつきが弱いからそこに付け込んだってのもあるけどな」

「で、なぜ今頃あらわれることが？」

「ああ、お前の体との結びつきが弱っていたからな。

……お前、この体に相当無理させただろう」

「それは——」

確かにそうだ。言い返しようがない。

「おいおい、あまり無茶するなよ。この体は

俺の命も積んでるんだからな」

「じゃああなたは他の生き物に乗り移ればいいのでは？」

「ああ……どうやらこの体を保つので精いっぱいだったようで力が回復、いや、回復はしないかもしれないが。

とにかく、今すぐほかの生き物に乗り移るのは無理そうだ」

「そうなんですか……」



昔の少年の記憶をあさってみてもそのような存在についての記憶はなかった。

確かあの時、母親らしき女性がいた気もするが。

その時、不意に眠気が襲ってきた。

あの母娘には悪いが、先に寝かせてもらおう。

瞼がどんどん重くなってくる。

——そうだ、最後に彼も言っていたが、夢の中で会えるようだな。その時に聞いておこう。この……少年の……母親の事を……

完全に眠りに落ちた。

## 第九話（後書き）

説明みたいな文章になってしまった感があつて  
変ですが、

次の方、宜しく願ひします。（。d（ノヨロ

## 第十話

梅雨前の優しい空気に包まれるような感覚。

……温かい。しっとりとしていて、鬱々とした気分もほだされてしまふ。

「――、――」

ぼんやりとした意識の中、知らない女性の声が聞こえた。  
不思議と「誰？」とは思わなかった。

綾香の母親に両親のことをたずねられた時のような、冷め切った、割り切った気持ちにもならない。

ただ……懐かしい、と思った。

「おーいつ、搭乗手続き終わ――」

「しー。おきちゃうでしょ？」

「え、……あ、ああ。ごめんごめん……。でもよく寝てるな」

「誰かさんが忙しく飛び回ってるからよ……。もう何回目かしら……」

……」

そこには？父親？がいて、？母親？がいて……

「……うん……、おはよ？　ママ」

？ボク？が――いた。

「おはよ。……でもまだ寝てて大丈夫よ。困るのは――さんだから」  
「……うん。……うん……」

そしてまた、ボクは？ まま？ に寄りかかる。  
優しく頭を撫でられた。

甘くて、くすぐったくなくて、おでこにキスをされて——切なさ  
が込み上げる。

もうどのくらい遠のいたかわからない。

わたしが始まる前の世界。

何の変哲も特徴もない、酷くありふれた——温かな幸せだけがあっ  
た。

\*\*\*

意識が覚めると目がはれぼったくて、頬の辺りが濡れていた。  
なるほどな。人間って弱い。

あんな曖昧な世界を夢見ただけで、涙もろくて仕方がない。

あんな——とってつけたような、幸せなんてありえないのに。

わたしは、前は人間すら恐怖に陥れる大ダコだった。

その前は、知能をいじられた、ずるがしこいサメだった。

その前は……もう忘れてしまったけれど、わたしはいつも何かを殺  
し、奪うものだった。

だから……

「ねえ！ 井沼って良いとこの坊ちゃん？」

「執事とかメイドとか侍らしたりしてんの？ 婚約者侍らして、諭  
吉の扇で煽って、諭吉の風呂に入って」

「ばーか、いぬっちは心臓が弱くて、入院漬けでベッドに拘束されて、重力に慣れなの」

「んなことより、あやとどこまでいったの？ キス？ セツ。ス？ 同棲ですか、焼けちゃうな」

「うわ、あや純情そうなのにな」

「あやちゃんを泣かしたら殺す！ そして――」

「お前も死ぬ」

「当然――じゃない！？ なにこの孔明の罠。俺死亡フラutterる！」

今の状況が理解できなかった。

目を開けたら、人間の男女に囲まれていた。ずっと質問されている。記憶喪失なんだ。と嘘をつこうにも口を挟む隙がない。

だから、助け舟を出してしてくれそうな人を探した。確かさつきは綾香がいて、母親を呼びに行ったはずだ。

だけど綾香の母親どこるか、綾香本人もいない。

……いや、いないからこそ彼らはこうもしゃいでるのか。

？俺？はそう感じている。

正直どう言い返せばいいかわからない。どんな表情をすればいいかわからない。

だいたい、何で彼らはここにいるんだ？

何か失敗をしただろうか。わたしは？人間？として不自然な事をしただろうか。

途端に不安になる。

――わたしは、これからここでうまくやっていけるのかな。

は、となる。

何を考えた？　なんで、もろくて弱い感情が生まれる。

わたしは転校生。だけどそれは元々、？俺？がいたかもしれない場

所。

わたしにとっての居場所ではない。

わたしは、ただの侵略者なのだから。

酷く頭がくらくらした。

50メートルなんかをやつて、体が動かなくなった時に感覚が似てる。

「……変わってくれよ」

夢を見ればコンタクトできるんじゃないのか。

完全に？俺？へやつあたりしながら、また目を閉じた。

遠くで、ストロベリーブロンドをなびかせる少女の声が聞こえた気がした。

## 第十話（後書き）

……なんか変な追加設定が  
話、繋がってます？

まあいいか。後の人、うまく回収してください。  
（丸投げ）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6962q/>

---

続きを書きましょう

2011年9月30日19時58分発行